

令和元年6月14日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03228

研究課題名（和文）東南アジアにおけるサッカー移民とグローバリゼーション

研究課題名（英文）Football Immigrants and Globalization in East South Asia

研究代表者

甲斐 健人（Kai, Taketo）

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：50272183

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本では近年、スポーツ人材育成が組織化され、多くの場合は多様な形でプロ化の推進と結びついている。その先駆けであるサッカーでは、東南アジアでプレーする日本人選手が急増している。本研究は、現代サッカーを選手の移動をうみだす仕組みとしてとらえようとする。シンガポールを主たる事例地として、日本人サッカー選手（「サッカー移民」）とそれを取り巻く在留邦人とのかかわりに注目し、グローバル化の一側面を描くと同時に、サッカーに携わる人びとの生活実践とそれを可能にしている仕組みを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

サッカーを人の移動を生み出す仕組みととらえることによって、スポーツとグローバル化に関する社会学的研究では看過されてきた周縁に位置する「サッカー移民」に注目し、その論理と生活の工夫を明らかにした。グローバルスタンダードモデルの普及、展開を目指そうとする昨今の日本サッカーとは異なる実践もあることを確認し、ワークライフバランスを視野に入れた、スポーツとの関わり方を考える基礎的知見を提供すると考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to describe modern soccer as a system of mobility. There are many Japanese professional footballers in Southeast Asia recently. In this project, we found couple of points as below; 1. Albirex Singapore was a gateway to soccer markets in Southeast Asia. 2. There were two ways for Japanese soccer players to go to Singapore as professional players. 3. Soccer Immigrants in Singapore had unique values which were different from aspiring just for upward mobility as professional players. 4. Transnational community was formed through sport practice.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：サッカー移民 グローバル化 シンガポール スポーツ社会学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 東京五輪を控え日本のスポーツ人材育成は早期化、組織化されている。プロ化の動向も重なり、競技力向上と同時に多数のアスリートが作り出される。このような動向の先駆けとしてサッカーに注目すると、近年、東南アジアへの選手の流出が急増している。グローバル化したサッカー市場の中で、東南アジアに活躍の場を求める人びとが移籍する仕組みや、彼らがどのように暮らしていくのかに注目し、現地邦人企業とのかかわりを視野に入れ考察しようとした。グローバル化を進める日本サッカーについて、考察する基礎的研究を目指す。

(2) スポーツとグローバル化に関する研究は世界システム論に基づき、スポーツ労働移民を類型化する研究と、「搾取」の対象とする研究とがあり多くの成果を上げてきた。しかしながら、いずれも、資本によって移動する労働者を前提にしており、移動するアスリートの論理そのものは看過されてきた。

2. 研究の目的

サッカーにかかわる職を求めて海外に移動する日本人サッカー選手や指導者を先行研究にならって「サッカー移民」と呼ぶことにしたい。東南アジアのサッカー市場における「サッカー移民」のプロサッカー市場への参入、および新たな市場形成と日本企業(在留邦人)との関係を分析し、「サッカー移民」とグローバル化との関係を論じる。結果的に、グローバルサッカー市場では顕在化されにくい「サッカー移民」の生活実践と、それを可能にしている構造を描き出そうとする。

3. 研究の方法

世界システム論を基盤にしたグローバル化を一元的にとらえる「上からのトランスナショナリズム」と、人々の生活戦略を多元的に把握しようとする「下からのトランスナショナリズム」を念頭に置き、後者の立場からサッカー選手の移動を考察する。その際、人が生きていける、死なない環境があることを「生存」、豊かに生きることを「生活」という語で表現した鳥越皓之を念頭に置き、「生存」を「食う」ことができる稼ぎがあること、「生活」をにぎわいのある暮らしぶりにとらえようとする。

調査の方法は、調査対象者の拡大や移動等に合わせ日本、シンガポール、カンボジア、タイ、オーストラリアで聞き取り調査を実施した。

4. 研究成果

1) 東南アジア8か国(シンガポール、カンボジア、タイ、フィリピン、マレーシア、ラオス、インドネシア、ミャンマー：前2国は2018シーズン、それ以外は2017シーズン)のプロリーグに在籍する日本人サッカー選手について整理すると、全125名のうち99名は最初に入団したプロサッカーチームが東南アジアのチームであり、その後東南アジア域外のリーグに移籍した経験をもつ選手は3名である。すなわち、東南アジアに日本人サッカー選手独自のプロサッカーマーケット(「東南アジア・サッカー・サーキット」)があることを確認した。同時に、学卒直後に入団した選手はシンガポールは65.5%、次いでラオスの25.0%であり、各国リーグにはアルビレックス・シンガポール(AS)在籍経験者が一定程度みられることから、近年はASが「東南アジア・サッカー・サーキット」の「入口」の役割を果たしつつある。ただし、ASよりも競技レベルが高いタイへの移籍は少ない。(東南アジアの日本人サッカー市場への「入口」としてのAS)

2) 「東南アジア・サッカー・サーキット」の中でサッカー選手として生きる若者の中には、給料や待遇面を重視する選手と、サッカー選手としてのレベルアップを重視する選手とがいることはわかっていたが、タイには「安心してサッカーができる場所」を求めてやってくる若者がいることがわかった。彼らは自分たちを「サッカー労働者ではない」と考えて

おり、サッカーとかかわりながら「他のことを見つけたい」と考えていた。オーストラリアにも、プロとして生活を送りながらも生活の安定や拡張を基底に据えて「サッカーのある生活」を延長させようとする者が表れていた。これまでのスポーツ労働移民研究では対象とされることがなかった「サッカー移民」が存在することが明らかになった。（「サッカー移民」の多様化）

- 3) シンガポールのプロサッカーチーム AS は経営状態の悪化によって消滅の危機にあった。GM を交代させ、人件費の削減や新規事業への進出を行うなど大幅な改善に取り組み、S リーグ 3 連覇という成果をあげた。それは、J リーグ選手の育成機関としての位置づけから、海外移籍のための「ショーケース」へとかじを切った結果だった。J リーグチームと強い結びつきをもち、日本的サッカーをシンガポールへ導入するという「正統性」を前面に出しつつ、活発に選手の入れ替えを行ってきた。そこには、グローバル化するサッカー市場を前提に、近い将来の上昇移動（移籍）をうたい文句に低コストで雇った選手に実績を積み、徐々に選手の質をあげながら戦績を残し、さらなる発展を図るという「時間」の操作と、それから漏れ落ちる人への「満足の提供」があった。（「正統的」移動システムの再構築）
- 4) シンガポールのローカルチームでプロサッカー選手として生活する人々は、「サッカーで飯を食う」ことによってプロサッカー選手になったことを自覚し、「労働としてのサッカー」を実現している。しかしながら、彼らが意図するのは金銭的対価をどこまでも上昇させることというよりも、年齢、家族構成、居住環境等、常に変化する生活条件に応じたサッカーとのかかわり方の模索、すなわち「生き方としてのサッカー」の模索である。その姿は、よりよい仕事を求めて世界を自由に移動するグローバルアスリートでもなく、資本に搾取される「ノマド」でもない。彼らは、生活条件の中で「労働としてのサッカー」と「生き方としてのサッカー」を成立させ、「生活を安定」させる場としてシンガポールに一時的に定住していた。（「正統的」移動システムの所産）
- 5) 東南アジア移籍には、エージェントの果たす役割が大きいことが分かった。エージェントは、日本国内の大手エージェント会社 2 社、現地エージェント会社、現地アテンド委託会社、個人エージェント（元選手、現地邦人）、中東やアフリカの業者など複数存在している。選手たちは何度かの移籍を経験することで、エージェントへの対応を学んでいた。多様化するエージェントの中で、現地アテンド業務が重要な位置を占めている。契約があいまいな場合も少なくない東南アジアでは、不測の事態に巻き込まれることも多く、移籍を希望する選手は信頼できる現地アテンド会社と緊密な関係を結ぶ必要がある。（移動システムに不可欠な要素、エージェント）
- 6) シンガポールに日本人元 S リーガーが起業した、在留邦人を主たる顧客とするサッカークラブ法人（G クラブ）がある。サッカースクールを中心に、トライヤルや遠征のアテンドなどを含めたサッカービジネスを展開しており、このクラブをもう一つの移動システムとみなすこともできる。G クラブの特徴は、お父さんコーチとレディースフットサルに顕著である。ボランティアであるお父さんコーチは必ずしもサッカー経験者ではなく、補助的な役割を果たしつつ、挨拶や片付けの指導、けがした子どもの世話など細かな目配りを行い、子どもに分け隔てなく接する。レディースフットサルは採算を度外視した取り組みのようで、女性たちの格好のコミュニケーションの場となっている。ほとんどのメンバーがいつシンガポールを離れるかわからない社会（一時滞在社会）を前提にして、次世代に日本的な文化を伝えながら、結びつきの場を求める場として G クラブは存在していた。（も

う一つの移動システム)

- 7) シンガポールで元プロサッカー選手が経営している G クラブは、上述のように日本人元 S リーガーたちが立ち上げた。クラブの理想としては S リーグに所属するトップチームを頂点にした選手育成のピラミッド体制を構想している。しかしながらそこには契約関係を越えた社会性を重視するなど前近代的な伝統が生かされる可能性や、コーチや選手としてマレー系シンガポール人を抱えるなどエスニシティの垣根を越えたつながりを形成する「ローカル」な動きが見られた。そこには、グローバルスタンダードで「上からのトランスナショナルナリズム」を推し進めるサッカービジネスとは異なる「サッカー移民」としての彼ら自身の越境的経験を通した下からのコミュニティ形成の動きがあった。(下からのトランスナショナルナリズム)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

1. 金明美、「スポーツを实践を介して形成されるトランスナショナルなコミュニティ 在シンガポール日本人『サッカー移民』が運営するクラブ活動の場に関する事例考察より」、『移民研究年報』、査読無、25号、2019年、pp.1 - 18
2. 後藤貴浩、「日本人サッカー選手の移動プロセスに関する研究」、『国土館大学教育学論叢』、査読無、36巻、2019年、pp.23 - 42
3. 後藤貴浩、「サッカーのある生活とその維持 カンボジア王国における日本人サッカー移民を事例に」、『AJ Journal』、査読有、13巻、2018年、pp.33 - 47
4. 後藤貴浩、「修正拡大地域とスポーツ」、『国土館大学教育学論叢』、査読無、35巻、2018年、pp.13 - 32

[学会発表](計 1 件)

1. 金明美、「ナショナルリズムを越えるスポーツの可能性と課題：シンガポール在住日本人『移民』のサッカー実践の事例を中心に」、日本移民学会第28回年次大会シンポジウム(招待講演)、2018年

6. 研究組織

(1)

研究分担者氏名：村田 周祐

ローマ字氏名：MURATA, shusuke

所属研究機関名：鳥取大学

部局名：地域学部

職名：准教授

研究者番号：00634221

研究分担者氏名：石岡 丈昇

ローマ字氏名：ISHIOKA, tomonori

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：准教授

研究者番号：10515472

研究分担者氏名：後藤 貴浩
ローマ字氏名：Goto, takahiro
所属研究機関名：国士館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号：20289622

研究分担者氏名：前田 和司
ローマ字氏名：MAETA, kazushi
所属研究機関名：北海道教育大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号：30229299

研究分担者氏名：伊藤 恵造
ローマ字氏名：ITO, keizo
所属研究機関名：秋田大学
部局名：教育文化学部
職名：准教授
研究者番号：40451653

研究分担者氏名：黄 順姫
ローマ字氏名：WHANG, soon hee
所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文社会系
職名：教授
研究者番号：50199147

研究分担者氏名：金 明美
ローマ字氏名：KIM, myungmi
所属研究機関名：静岡大学
部局名：情報学部
職名：准教授
研究者番号：50422738

研究分担者氏名：松村 和則
ローマ字氏名：MATSUMURA, kazunori
所属研究機関名：筑波大学
部局名：体育系（名誉教授）
職名：名誉教授
研究者番号：70149904

研究分担者氏名：大沼 義彦
ローマ字氏名：OHNUMA, yoshihiko
所属研究機関名：日本女子大学
部局名：人間社会学部
職名：教授
研究者番号：70213808

研究分担者氏名：橋本 政晴
ローマ字氏名：HASHIMOTO, masaharu
所属研究機関名：信州大学
部局名：教育学部
職名：講師
研究者番号：90350181

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。